安政地震の噴砂現象

この絵は、安政３年（1856）に出版された安政見聞録中巻に載っているさし絵である。○地震の前後地脈狂ふの條という章に、著者服部保徳の知人中山某が地震の折にたまたま駿府にあって噴砂現象を目のあたりに見た話が、下記のように書かれている。

昭和39年の新潟地震では、軟弱な地盤では地震動により砂層が流動状態になる、いわゆる流砂現象が起こって問題になった。新潟市でも、この流砂現象に伴って、信濃川流域のかなり広範な地域で噴砂現象が起こった。

流砂現象や噴砂現象を新潟地震の時にはじめて知って驚いた人も多かったのだが、安政地震のときすでに静岡県では体験していたのである。

……この地震（嘉永７年11月５日＝1854Ⅻ24）のとき余が知己なる中山何某といへる人遊歴して駿河に居れり。この国は海道にても別て地震の厳しと聞り。その日巳刻ごろ中山氏外の方にたち出て人と物語なし居けるが破驚地震よといふ間もあらず両足痿て磕と倒れ起あがらんとなしけれども。かの小児が戯れにすなる俵転びといふに斉天で転々として立を難し。當下泥中より烟のごとく。沙のごときもの吹出て。満面を打るゝほどに。目口だに開き得ず。心昏瞑して前後もしらず暫くして揺静まり。漸く心地われに返り。起上りて四辺を見るに。家みな斉しく崩れ倒れて。在し容には似もつかず。四方に人の泣声聞えて。こは生ながら叫喚地獄へ堕しものかとあやまたれ。心を静めて篤と見るに。わが家も崩るゝのみか。三尺ばかり地中へ陥り。衣類調度も何方にあるか。屋根壁崩れて覆ひぬれば。頓に出さんやうもなく。只管に呆れ惑ふ。一圓斯のごとくなれば。一夕の米もなく。これを炊かん器さへみな地中に埋もれて。いかにとも詮方なし。殊にこの辺の井僉崩れたり。任意崩れざるも泥吹き入て。更に飲べきやうもあらねば。人々飲食を断にけり（思ふに江都の地震烈しけれども。かくばかりの事はあらず。但し怪我人の他方より夥しきは。土地に人の多きがゆえのこと）かくてその翌日に至り。邑の荘屋諸方を募り。漸くにして米を得つ。粥に煮て施したれば。始めて喉を潤せり。この中山氏もその翌日粥を啜りしは未刻なりとぞ……

（絵は**東京大学地震研究所**提供）

甲寅の十一月
駿河の國大地
震にて泥水
をふき出を圖